

猫の化け物

むかしむかし、あるところに恵比須屋のあん様と、大黒屋のあん様といであつたんだと。それで、夏で、暑い時は毎日浴衣を着て、橋の欄干に遊んでいであつたんだと。で、毎晩あん様がた何人かがあるところを通るので、それに冗談を言いながら、友達になつたんだと。ある晩に「あん様の家さいがねがあ」と誘われたんだと。それで、ついで行つたところ、ずっと山奥の、またその奥に大っきな、大っきな立派な家があつたんだと。それでそこに行つたら、いっぱいこつこつおーがあつて、お酒も頂いて、そしてこつこつおーなつて、トイレに行こうかなあつて、奥の方にいったら、居間の方で大っきなおばあさんがゴロンとながまゝでいてあつたんだと。横になつて。おばあさんが言

うに、「おやおや、大黒様のおんさんと、恵比須屋のおんさんだつてねえが」「そうであ」って。「よく来たねえ。よく来たけれども、ここはねえ、猫の化け物の家で、今にあなたがた、ここに居るとみんな食べられてしまうんだよ」って。それで、二人ともびっくりして、「どうすればいいかあ」って。むかあし、おばあさんが、大黒屋の家さ飼われてあつた猫であつたんだつて。優しくしてもらつて、こういうふうにな長生きして家に住んであつたんだど。それで、「今のうちに逃げないと大変だことになるから」って、裏の口から大黒屋のおんさんと恵比須屋のおんさんを逃がしてくれて、三枚のお札をくれたんだつて。「あなたがた今逃げると、ここのおつかねえ、その猫がたが後を追つて行くから、今食べらるようになったらこの札を一枚ドンと投げればいい」って。「そしたらまずすぐ逃げれ」って、裏から逃げさしてもらつて、そしてずっとドンドンドンドン走つて来たんだど。そしてたつて後ろからニャンニャンニャンニャンつて、猫がたがねえ、後を追つて、そしてヤンヤンヤンつて騒いで来たところで、今もう少しで捕まるかなあと思つて、その札を一枚ゴンと投げたら、大きな藪ができたんだど。そして今度猫がたは、藪をドンドンドンドン越いて、山をドンドンドンドン越いて、そして近くまでニャンニャンニャンニャンつて追つて来たところで、その札を一枚ゴンと投げたら大きな堤ができて、それで今度またずつと、その猫の化け物と遠くなつて、また自分がたの村に村にと向かつて走つて来たんだつて。そし

てまた近寄つて、食べられるようになったら、まあたもう一枚の札をドンと投げたら、大きな大きな山ができて、村にもどつて助かつたんだつて。だから、きれいなあねさんがいても、だまされないように、そういうふうにしなないと、自分の身が猫の化け物に食べられるんであつたんだつた。とつぴんばりのぶい。

仁平佐喜子(鶴形 65歳)

〔解説〕

「通観」で「三枚のお札」(逃走型)に類型化されている昔話である。三つの呪物(お札)によって障害物をつくり、小僧(おんさんたち)の逃げるのを助ける話。多くは、逃げる小僧・それを助ける和尚・追いかける鬼、の三者で構成されるが、ここでは、逃げるのは商家のおんさん、助けるのは猫が化けた婆さん、追いかけるのは猫、という設定である。助ける婆さんとは猫であり、追いかける猫と同類である。和尚のような存在ではない。きれいな姉さん・大きな家・ご馳走、という誘惑物をおいて、それを乗り越える工夫や度胸などに面白さを加えている。商家のおんさんを、大黒・恵比須という神様に擬したり、障害物も藪・堤・山であつたりする。類話には砂山や川や沼であつたりする。小僧が逃げ込んだ寺で和尚が隠してくれたり、鬼を説教したりというように、設定に面白さがある。三枚の札が護符(お守り)となつて、追われる弱者を助けるという話である。

「龍代の昔ばなし」には、檜山に伝わる「三枚の札」が収められている。小僧が和尚に危険だから行くなと言われながら、どうしても行きたくて、和尚から三枚の札をもらつて出かけた。途中で鬼婆が出て

きて小僧を縛った。小僧は一枚目の札で縄を解き、さらに追ってきた鬼婆を振りきるため、二枚目の札で道を造って林を突き抜け、三枚目の札で川を造って、寺に逃げ込んで助かったという。

『伝承文芸』には常盤に伝わる「三枚の護符」がある。やはり和尚の制止を聞かずに山に入った小僧が、三枚の護符をもらって山に行き、泊まった小屋の婆さんが鬼婆に変身して小僧を喰おうとする。逃げる小僧は、一枚目の札で湖を造り、二枚目の札で山を造り、三枚目の札で針山を造って追撃をかわして寺に逃げ込んだという。